

療護施設職員リレーエッセイ

みんなに伝えたい

さわやかな風の吹く中で

安田 博明

青森県・身体障害者療護施設千年園次長・介護サービス部長事務取扱



いつもの朝の目覚めの中で、いつもの風景が繰り広げられます。N君はゴミ袋を持ち、皆の居室を廻り屑カゴからゴミを集めていきます。それが終わると、今度は朝食の下膳のお手伝いが待っている。途中、お茶タイムで一服した後は、布おむつを畳み倉庫へ運んで行く。その間、自分より重度な利用者への心遣いや、お手伝いを進んでやってくれます。N君は朝から夜就寝するまでの間、とにかく自分の事よりも誰かのために、お手伝いをして動いていることに生きがいと喜びを見いだしているのです。重度の知的障害のある利用者ですが、「N君、お願いできるかな」と言うと、「アイ！」と言ってニコニコしながら急いでやって来ます。彼のやる事は完璧です。しかも、何も求めず、ただひたすらに黙々と最後までやり遂げます。その姿に頭が下がる思いです。彼の生き生きと自分のやる事に喜びを持ってやっている姿を見て思います。施設生活は、職員だけで支えている訳ではありません。そこに住んでいる利用者一人ひとりの思いと人生があり、お互いの障害を認め、助け合い協力しながら生活していることで成り立っているのです。そこには、利用者個々のかけがえのない人生が光輝いています。実にたくさん人間性豊かな人たちに囲まれて、私達の方が逆に毎日、元気づけられております。

彼らのそんな生活を少しでも支援でき、障害があっても「生きていて良かった」、「千年園で皆と一緒に生活できて楽しかった」と思われるような生活を、どうやったら実現できるのでしょうか。

今、療護施設は社会の変動の中で、大きく揺れ動いています。利用者本位と言いながらも厳しい現実を前に、現場で働く職員もその動向に一抹の不安を抱き始めているような気がします。しかし、そんな中にあっても療護施設の職員として「何を求めて、何をすべきか」の本質を忘れてはならないと思います。

糸賀一雄先生が『この子らを世の光に』と日本版

のノーマライゼーションという人間の価値観を唱えたことと、徳川会長の「最も重い人を大切にする」という療護施設本来の理念を思い出してほしいと思います。

N君がひたむきに、ただ無心に働く姿の尊さは、人間としての素晴らしさを私達に教えてくれています。

現場で働く者として、そのことに気がつく“感性”を持っていることがなによりも大事なのではないのでしょうか。相手が何を求めているのかということに、謙虚に耳を傾けていくことだと思います。そして、相手がどんなに重い障害を持っていても、そのことに真摯に応えて行くところに療護施設としての存在意義があることを忘れてはならないと思います。その思いの中にこそ、利用者との心の交流を結びつける豊かな人間関係が潜んでいるような気がします。

ここ数年来、寝たきり状態から医療的ケアが要求される利用者が増えて来ています。そんな中にあればこそ、物言えない人との“雰囲気共有”し、かすかな反応の中にある“ほほえみ反応”を見逃さない豊かな感受性を持ち続けたいものだと思っています。このことは、永遠に替わらないテーマではないのでしょうか。そしてまた、利用者の“笑顔”を見ることが何よりも大切なのだということを、N君より教えられたような気がします。

今日もまた、いつものように施設の中をさわやかな風を切って、ほほ笑みを浮かべながら体を動かしているN君を見て、私も「頑張るぞ」と自分に言い聞かせているところです。

